

日本心理学会第89回大会 公募シンポジウム（2025年9月7日）
宗教を信じる（信念、信仰）とはいかなることか？
— 実証的宗教心理学の挑戦(4) —

精神科臨床と宗教的契機

— 一定点性をめぐって —

小笠原 將之

関西福祉科学大学 心理科学部
大阪大学大学院 医学系研究科 精神医学教室

はじめに①

- ▶ 精神医学や精神科臨床の領域は、宗教を十分に扱えていない面がある。
- ▶ 精神分析の創始者であるFreud, S.は、論文『ある幻想の未来』(1927)にて、「宗教的教理はすべて幻想であり」、宗教は「人類全体がかかっている強迫神経症」であり、「信心深い人は、集団的神経症にかかっている」などと述べており、明らかに宗教を精神病理として捉える立場をとっている。
- ▶ 演者の専門とする精神病理学の領域でも、宗教に関しては「宗教妄想」や「宗教二世問題」など、主に宗教のもつ病理性に焦点を当てた議論が中心となってきた。
- ▶ 実際、宗教原理主義による戦争やテロリズム、あるいはカルト宗教による洗脳や家族崩壊などの深刻な事例は確かに存在しており、特に現代の日本においては、宗教は否定的なものと見做される傾向が存在している。

はじめに②

- ▶ しかし、演者は宗教をそのような否定的な切り口のみで捉えようとする風潮に対して以前から異を唱え、その治療性に関して考察を紡いできた。
- ▶ 演者は精神医療の現場において、精神・心理療法的な対応を中心とした臨床活動を実践してきたが、筆者が治療を担当した症例の中で、「神との出会い」を通じて「信じること」が成立した瞬間に、それまでの精神的不調がほぼ瞬時に解消したという劇的な展開を果たした症例に出会うことが何度かあった。
- ▶ 彼らは、それまでに「信じる」ということが自身の経験において成立しておらず、精神的な不安定さに嘔まれて出口の見えない袋小路の状態に陥っていたが、自身の精神活動の外部から到来した《何か》によって充実感に満たされ、絶望から脱却することができた。

はじめに③

- ▶ 彼らはその《何か》を異口同音に「神」などと表現した。しかし、宗教的には回心(conversion)とも形容しうるこれらの体験を通じて、彼らは決して具体的な何かの宗教に絡め取られたということではなく、むしろ精神活動の自由度の大幅な向上がもたらされたことが、その経過から明らかに読みとれる。
- ▶ このような変化は、決して頻繁に遭遇するものではないが、複数のクライアントでこのような変化が生じるということは、そこに人間の普遍性に通じる、治療の本質に至る鍵が隠されていると考えることは、決して間違いではないであろう。
- ▶ 以下に、演者が経験した臨床事例のうち、劇的な治療的展開が生じた一例（小笠原, 2016）を採り上げ、その概要を示す。

症例提示①

- ▶ 症例 A（20歳代・女性）、診断名：神経性やせ症（摂食制限型）
- ▶ 両親は共働き（共に教師）であり、幼少期から、特に母親の不在をめぐって寂しい思いをすることが多かった。
- ▶ 高校時代には芸能活動を志して芸能スクールに通うも、トラブルで辞めたことで自信を喪失し、その頃からダイエットに励むようになった。
- ▶ A は母親に対して強い憎しみや不信感を抱く一方、父親には溺愛されていた。
- ▶ A は父親の出身大学と同じ大学に進学し、父の趣味に関係のある仕事に就くも、後にそのことに違和感を覚えるようになった。
- ▶ X 年 5 月、近医より低体重のため演者の勤務していた病院に紹介され、演者が精神科的治療を担当することとなった。

症例提示②

- ▶ 初診時の体重は28kg（身長165cm、BMI=10.3）で、Aは「本来の自分」として生きられていないことに違和感を抱いている様子は窺えたが、陳述は表面的で、自覚が成立している印象は受けず、わずか2回で通院は途絶えた。
- ▶ その約2年後に再来院した際、体重は26kgとさらに減少しており、その翌月に自宅で低血糖性の意識障害を来して同院の救命センターに搬送された。体重は23kg（BMI=8.4）まで減少しており、餓死に至る危険が高かったため、精神科病棟に入院となった。
- ▶ 当初Aは強い抵抗を訴えたが、その後2～3日のうちにAの態度は大きく変化し、喜びに満たされて穏やかに過ごすようになり、治療にも協力的となった。

症例提示③

- ▶ Aは「今までは、家族から愛されるために体重を減らすようにしていた」「入院して、自分は周りからすごく心配され、愛されていることが分かって、本当に生きていてよかったと思えるようになった」「今回の出来事で、私が一番求めていた『神からの赦し』を頂いたと思えた」「毎日、生きていること、生まれてきたことに感謝して過ごしています。食事をするのがとても楽しく感じます」「はじめて『他の人とつながっている』と感じられるようになりました」「世界には宗教の対立などがあるけれど、神様というのはそういう対立を超えたところにあるのだと思います」などと自発的に語るようになった。
- ▶ Aにはそれまで経験したことのなかった人生の意味に関する感覚や安心感が生じたことに加え、自身の体型への自覚や恥じらいも生じ、この変化を通じて、変化前には感じられなかったAの内面の存在感の手応え、いわば「芯」のようなものが形成されたことが窺われた。

「信じる」ということ①

- ▶ 人が「何か」を信じることは、その「何か」を自身の精神活動の秩序を担う定点として位置づけることを意味するため、その秩序の安定性はその「何か」の定点性の様態に大きく左右されるということになる。
- ▶ 精神医学の症状の一つである妄想は、誤った訂正不能の確信である。その妄想内容は、精神的秩序を担う定点という位置づけを有し、当人の精神活動はその妄想観念に支配されている。当人はその観念の奴隷となり、精神活動は硬直化し、「その観念の妥当性を吟味し、適否を問う」という主体性は全く機能しなくなっている。
- ▶ あるいは、イデオロギーに絡め取られた状態も、特定の観念体系が精神的秩序を担うに至った状態であり、妄想ほどではないにしても、その精神活動はその観念体系の硬直化に影響され、その分だけ当人の主体性は低下している。

「信じる」ということ②

- ▶ 一方、先程の症例の改善のきっかけとなった「信じる」ことは、妄想にみられるような硬直化とは真逆で、むしろ当人の精神活動はそれまでの硬直性から解き放たれて自由度が向上し、当人は主体的に自身の人生を生きられるようになったところが異なっている。
- ▶ このように、一言で「信じる」といっても、これらの両者の道筋（硬直化の方向と、自由化の方向）は真逆と言っていいほど異なるものであるが、その差異はどこに由来するのであろうか。
- ▶ 硬直的な「信じる」の方は、当人の精神活動の内部に含まれているある要素が絶対化したものであり、その精神活動はいわば《外部》から閉ざされているのに対し、自由度の向上をもたらす「信じる」は、症例が「自身の精神活動の外からの要素の到来」を明確に感じとったことにより、「信じる」と「自由度の向上」が同時的に生じたという点で、《外部》に開かれているということが出来る。

「信じる」ということ③

- ▶ この「精神活動の《外部》に開かれているかどうか」が、両者の質的相違の背景に存在すると考えることができる。
- ▶ ここで《外部》というように二重山括弧付きで表記した理由は、それは空間的な外部とは次元が異なることを示すためである。《外部》は、特定の具象として存在するものではないことは、先述の症例がそれを「神」と表現したことにも表れており、さらにこの《外部》の到来の影響は、本人の精神活動の内部にも確実に滲透し、その安定性や主体性の支持をもたらしたことも明らかである。
- ▶ この《外部》は、具象存在ではないが故に変形や喪失から免れており、その支持は、当人の精神活動がどのように変化しようとも決して変化することなく、一定の支持を当人に与えるという意味で、当人の精神活動の安定性を担保するものでもある。

「信じる」ということ④

- ▶ 逆に、このような《外部》の到来がなければ、人間の精神活動はその内部の要素の構築性の強化（定点化）によってしか秩序の安定化を図ることができなくなるため、その定点を死守するためにその精神活動は硬直化を余儀なくされ、その分だけ主体的な機能も損なわれざるを得なくなる。即ち、精神活動の《外部》に開かれているかどうか、人間の主体的機能に大きく影響するのである。
- ▶ 古代のキリスト教の神学者のOrigenes, A.は、人間が以下の3つの要素から成るとする三元論を提唱した。
 - 霊（pneuma / spirit）
 - 魂（psyche / mind）
 - 体（soma / body）

その区分に倣えば、魂が人間の精神活動の次元であるのに対して霊は《外部》の次元に由来するものに相当し、《外部》の霊の次元こそが人間の精神的な主体性や柔軟性の鍵を握っていると表現することができる。

宗教の本質と病理①

- ▶ 先述のような宗教の病理性や治療性は、どのように説明できるであろうか。
- ▶ 神や仏などに関する観念は、人間の精神活動の内部に位置する。宗教の病理と言われるものは、宗教にまつわる観念の絶対化である。その体制の動揺は当人にとっては自身の秩序を脅かすものとして体験されるため、その動揺に対して当人には強い不安や怒りなどの陰性感情が生じやすくなり、宗教の本質である平安とは真逆の方向に向かうことになる。宗教原理主義者にとっては、宗教とはそのようなものとして体験されていると考えられる。

宗教の本質と病理②

- ▶ 一方、《外部》の霊の次元に軸足が置かれた場合、当人の精神活動すなわち魂の次元の内容（思考・感情）に当人の精神的安定性は影響されなくなるため、当人の精神活動の自由度が担保されることになる。次の聖書の御言は、そのような状態をいみじくも描写している。

「主は霊である。そして、主の霊のあるところには、自由がある。」
(新約聖書 II コリント書 3:17)

- ▶ このような《外部》に向かう心の働きが信仰と呼ばれるものであり、それこそが宗教の本質であると言えよう。
- ▶ 以上に述べたように、宗教が治療的に作用するか、それとも病理的な色彩を帯びるかは、《外部》の霊の次元との接続の有無によって決まってくるものと考えられる。

信仰と信念①

- ▶ 「信じる」ということに関連して、「信仰」(faith)と「信念」(belief)という言葉がある。それらは一見類似しているが、これまでの考察に基づけば、この両者の間にも大きな違いが存在することが分かる。
- ▶ 信仰は、精神活動の《外部》（霊の次元）に向かうものであり、すなわち精神の《外部》を定点としてそこに軸足を置いている状態を指している。

「さて、信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである。昔の人たちは、この信仰のゆえに賞賛された。信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉で造られたのであり、したがって、見えるものは現れているものから出てきたのではないことを、悟るのである。」

（新約聖書 ヘブル書 11:1-3）

- ▶ 以上の聖書の御言にあるように、精神活動の《外部》それ自体は概念化の対象にはなりえず、経験的に悟る、すなわち実感として感じるしかないものである、と言えるであろう。

信仰と信念②

- ▶ 一方、信念は、精神の内部の要素（思考内容）に執着する態度であり、ある思考内容に執着するということは、その思考内容の硬直化、あるいは客体化困難を意味するため、信念は得てして独りよがりとなる。
- ▶ 俗に「信念の人」などという表現があり、それは「強さ」を帯びた肯定的な特徴をもつものと理解されがちではあるが、思考内容の硬直化によって精神的な秩序を保とうとするあり方は、逆に言えばその思考内容が当人にとってのアキレス腱になるということであり、それはその体制が脆弱性をもつことを示している。

まとめ①

- ▶ 人間の精神は、Origenes, A.の三元論でいうところの「魂の次元」と「霊の次元」から成り、霊の次元というものを視野に入れることを通じて、精神的な健康や病理という現象を説明することが可能である。
- ▶ 人間の精神活動の内容の如何によらない一貫性や安定性は、精神活動の《外部》である霊の次元に由来する。その本質は概念化できないものである以上、それは「空無」という性質を帯びるが、それと同時に人間の精神に一貫した自己感覚を安定的に付与するという意味で絶対性をもつため、人間に《充実》の感覚を与えつつ、その精神活動を相対化・間接化することによって思考の柔軟性を担保する。この《外部》である霊の次元に開かれることは、人間の精神活動の円滑化や主体的機能を担保する。

まとめ②

- ▶ 宗教は様々な要素（信仰、教義、教団、等）から成るが、その本質は信仰、すなわち《外部》へ向かう働きを通じた精神活動の円滑化や自由度の向上である。逆に、イデオロギー的な原理主義は宗教そのものの問題ではなく、むしろ「信仰」から離れた人間が嵌まりやすい陥穽と言うべきであろう。
- ▶ この世界の中には、心底信じられるものなど何一つ存在しない。何かを「信じる」ことは、その何かに定点性を付与することである。しかし、思考内容（魂の次元）への定点性の付与は精神活動の硬直性を結果する。
- ▶ 定点性があっても柔軟性が乏しければ、人は強情になり、すなわち観念の奴隷に成り下がる。一方、柔軟性があっても定点性に乏しければ、人は周りの意見に流されるようになり、すなわち他者の精神的な奴隷に成り下がる。それらのあり方は、いずれも主体的機能不全の表れである。
- ▶ 主体的な人間とは、定点性と柔軟性の両者を兼ね備えるということであり、それには精神活動の《外部》（霊の次元）に由来する確たる支持が必要である。

まとめ③

- ▶ 以上、人間の精神活動を「魂の次元」と「霊の次元」から考察してきたが、「魂の次元」と「霊の次元」が峻別されていないこと、あるいは「霊の次元」が視野から外れていることが、宗教に関する誤解を生ぜしめ、宗教的契機のもつ治療性を論じることの妨げになってきているのではないだろうか。
- ▶ 精神・心理臨床は、宗教的契機、特に《外部》としての「霊の次元」を視野の内に含み込むことを通じて、さらなる展開を目指していくべきであると考ええる。

ご清聴有難うございました

ご感想やご質問は、「ogasawara@tamateyama.ac.jp」までお寄せください。

参考文献

- ▶ Freud, S. Die Zukunft einer Illusion. Internationaler Psychoanalytischer Verlag, Leipzig, Wien und Zürich, 1927. (浜川祥枝訳, ある幻想の未来 (フロイト著作集 第3巻). 人文書院, 京都, 1969.)
- ▶ 小笠原將之. 精神療法の本質としての「祈り」. 祈りと救いの臨床 2(1): 173-183, 2016.
- ▶ 新約聖書(口語訳), 日本聖書協会, 東京, 1954.
- ▶ Origenes, A. de Principiis Libri IV. (小高毅訳, 諸原理について. 創文社, 東京, 1978.)